ダーク・マジシャン -Last stage-

覇王樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダーク・マジシャン　－Ｌａｓｔ　ｓｔａｇｅ－

【Ｎコード】
Ｎ３５６１Ｚ

【作者名】
覇王樹

【あらすじ】
ザックスは英国系日本人である。一部の英国系日本人はザックスの父、デイビス・アンドレスの人体実験により術をザックスたちの体の中に組み込まれることになった。その術はイギリスの戦争のために使用されることになりザックスたちはいくつかの戦争を経験した。ミイナは世界を滅亡させザックスは滅亡した世界を作り戻した。しかし、その世界にはオリジンパワーと術が存在していなく術を持っているのはザックスだけ。前の世界のことを知っているのはザックスの父さんデイビスとイギリスの総司令部のドード。そしてザッ

クスだけだった。死んだはずのザックスの母さんやマリも生き返っていていた。ザックスは元の世界に戻るか、この世界で生きていくか・・・　しかし、ドードは術とは違って科学で開発された能力を新しい世界で実現する。抵抗できるのはザックスだけ。この世界はどうなっていくのか

はじめに

ダーク・マジシャン　１期、２期に続いて最後の３期目に入りまし
た！！
１期、２期を知りたい方や小説に興味を持ってもらった方は以下の
ブログに行ってもらえるといいと思います。
ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇ．ｌｉｖｅｄｏｏｒ．ｊｐ／ｓａｔｏｘｉ
ｓｔａｎｂｕｌ－ｈａｏｕｊｕ／
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝
これまでのあらすじ

ザックスは英国系日本人である。一部の英国系日本人はザックスの父、デイビス・アンドレスの人体実験により術をザックスたちの体の中に組み込まれることになった。その術はイギリスの戦争のために使用されることになりザックスたちはいくつかの戦争を経験した。そんな戦争の中ザックスは恋人のマリを亡くす。どうしても謝りたかったザックスは旅を成功させれば死んだ人に会えるという話を聞き仲間のキリヤと旅の途中に出会ったテイト、ルメリ、ミイナと一緒に旅を続ける。しかし、旅の途中にザックスたちが持っている術を狙う術者狩りが現れる。そんな術者狩りを倒しながら、いろんな人を助けながらザックスは無事に旅を成功させた。マリにも会うことが出来、一旦家に戻るとザックスはボスから途中に出会った１２歳のミイナと日本で暮らせと命令される。２人は日本で新生活を始めたが２人の前に現れたのは術者狩り。しかし、その術者狩りが狙っていたのはザックスではなくミイナだった。ミイナはオリジンパワーという昔から伝わる世界を滅亡することもできるという特殊な

力を持っていた。術者狩り達はその情報を聞くとミイナを狙い始め、次第にイギリス軍の司令官のドードの耳に入りドードはザックスの仲間を使用しザックスたちと戦争を仕掛ける。そんな戦争の中、ザックスの仲間だったのは同級生の小鳥坂、裕太、透哉、綾乃だった。４人は命を懸けてまでミイナを守り続けたがミイナはとうとう悪の顔という世界を滅亡させるぐらいの力を出す準備を開始してしまいミイナは世界を滅亡させた。滅亡した後、ザックスとザックスの父さんのデイビスは世界を再建させるがその世界にはオリジンパワーという存在が無かった。そのため術を持っていたのはザックスのみ。ザックスは新しい世界を作った人になったが周りの人はそんなことをしらずにいつも通りに生活をしている。

これからの話。

そんなザックスは元の世界に戻りたいかこの生活に慣れて行くかを悩んでいた。だが、この世界でも新しく人体実験が開始されようとしていた。前の世界の記憶を持っているのはザックスとデイビスそして、ドード。ザックスはどのような選択を取るのか？

間もなく投稿開始！！

第１話（５３話）　オリジンパワー（前書き）

はじめましての方ははじめまして！
前作も読んでいただいた方は今作もありがとうございます！
☆この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。☆
今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

もしよろしければこの小説についてのブログもどうぞ！ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇ．ｌｉｖｅｄｏｏｒ．ｊｐ／ｓａｔｏｘｉｓｔａｎｂｕｌ－ｈａｏｕｊｕ／

第1話（53話）　オリジンパワー

第53話（第1話）
ここはイギリス。俺は、ザックス・アンドレス。英国系日本人で日本名は海藤　こうきという名前を持っている。いきなり話しても誰も信じてくれるわけ無いが一部の人の中では俺がこの世界を作り上げたことになっている。まぁ、そんなことを言っても誰もわかる訳が無い。もっと言えば一部のひとのなかではこの世界は1週間前にできたという設定になっている。もちろんほかの人がそんなことを知っているわけが無い。ほかの人の中ではこの世界は何千年前、何億年前からできている設定になっている。

どうしてこんなことになったかというと・・・原因はひとつだけ。
「オリジンパワー」のせいだ。
今は俺だけしかもっていないが俺の知っている前の世界には術というものが存在していていろんな種類の術を持っている術師と呼ばれる人たちが居た。その中の一人が俺。その術はすべてオリジンパワーという誰にも解説できない特殊な力でできている。それを術に開発することができたのは俺の父さん。デイビス・アンドレス。父さんといってもはっきり言って一緒に居た記憶がほとんど無い。俺は父さんをずっと嫌っていた。嫌っていたというより父さんと認めたくなかった。母さんが死んだ時だって葬式にすら来なかったほどの奴だった。
簡単にまとめられると俺たち術者は父さんのモルモット役だ。
まぁ、今は俺たちと言うのは正しくない。俺って言うのが正しいかもしれんが。
これが俺の知っている世界だった。だが、この世界は違う。術という存在よりもオリジンパワーという存在が無いのだ。だから術によって死んだ人はこの世界で生きている設定になっている・・という

ことだ。

俺の知っている世界だったら恋人を戦争中に俺の身代わりとして死んだ人がいたんだ。だが、オリジンパワーというものがこの世の中には存在しないためそいつはこの世界で行き続けている。俺の母さんは術者狩りが俺を探しているときに母さんに俺の居場所を聞き続け最終的に口を閉ざしていた母さんは殺された。だが、さっきと同じくこの事実はこの世界ではなかったことになっている。

もちろん、こっちの世界のほうがいいんだよな・・・　亡き人もここにいるし・・・術も無い戦争も無い平和な日々を過ごすことができるし・・・　でも何か違うんだ・・・俺の本当の気持ちの何かが・・・　いったい何なんだよ・・・

「ザックス？どうしたの？」
とマリは俺に声をかける。

そう、俺とマリはデート中でハンバーガーチェーン店に来ていた。

「いや、なんでもない・・・」
と俺は言う。
俺は自分の仲間には俺が術を持っていることと違う世界から来たことは黙っている。だからこっちの世界に居た俺と同じことをしているわけだ。

「最近ザックス調子がおかしいよ？大丈夫？」
とマリは聞く。
「あぁ、少し疲れているだけだよ・・・ありがと」
と俺は言う。
「なんか悩みとかあったら相談してよ？」

とマリは言う。
「あぁ、そのときは話すよ」
と俺はいい食事を続ける。

俺は今でも驚いているんだ。なんで俺は今マリと一緒に食事をしている？デートをしている？
俺は過去に死んだマリに会うために旅をしたことがあるんだ。それなのにこうやって食事をしている・・・　不思議だ・・・
とずっと思っている日々だった。
こんな日々も悪くない・・と思いながらずっと考えていた。
「そういえば、今朝のニュースに書いてあったけどどうやらイギリスが新しい軍事力をつける予定って言ってたわ。」
とマリは俺に教える。
俺はその話に耳を傾けた。
「軍事力？この国はまた戦争でもするつもりなのか？」
と俺は言う。
「どうなのかしら・・・裏ではそう考えてるかもしれないわ・・・」
とマリは言う。
マリは将来、新聞記者になりたいらしい。だからそういう情報は毎日欠かさず見ているんだ。

「まぁ、うわさだろ？　それじゃあ誤情報かもしれないしよ！」
と俺は話を変えようとする。
まさかこの話がこれから重要になるとは知らずに
「そうね・・・　先のことを言ってもしょうがないわよね。」
とマリもいい話は変わる。

・・・・
・・・・
食事の後、俺たちはいろいろと店を回り家に帰ることにした。

家に帰ってきたときはもう夕方近くだった。

久しぶりに出かけたせいか少し疲れていた。
日本の学校は夏休みにちょうど入ったからどうにか大丈夫みたいだ。
俺の知っている世界だったらミイナのために日本へ引っ越したんだがこっちの世界だと俺は自分で日本の学校へ行くといって飛び出したという設定になっていた。

まさか、俺がそこまでするわけないのに。

俺は家に帰るとすぐにベッドへと飛び込んだ。
そして今日1日携帯のメールをチェックしていなかったことに気づく。
携帯は充電がすぐなくなるスマートフォンだからメールのチェックは手動更新でチェックするようにしている。

するとキリヤからメールが来ていた。
『Ｄｅａｒ　Ａｎｄｒｅｓ　Ｄａｖｉｓ
デート中だったかしら？
真っ最中だったらごめんね。
いろいろと情報を集めたから伝えたいことがあるので午後7時に駅前まで来てくれないかしら？

よろしく。
Ｋｉｒｉｙａ』

最初の分が嫉妬みたいな感じだったが何かを伝えたいと書いてあった。
キリヤだけが俺の事情を少し知っている人だ。だがミイナのことについては何も知らない。

まるで居なかったかのように。

時間は午後6時半だった。まだ間に合うと思い外へ飛び出す。

・・・・・

・・・・・

近くの町の駅へついた。

この駅はロンドンへの特急電車も止まる大きな駅でロンドンまで30分ぐらいでいける便利な電車にも乗れるわけだ。

午後7時。約束どおり駅前に着く。

まだ日は暮れ始めていた頃だった。

そして俺はキリヤを見つける。

「わりぃわりぃ、待ったか？」

と俺はキリヤに話しかける。

「私もちょうど来たところよ」

と笑顔でキリヤは言う。

正直こんなキリヤは初めて見るような感じだった。

「今日、いろいろと時間が空いてたからあんたの父さんのことについて調べたわ」

とキリヤは言う。

「まぁ、ここは人も多いからレストランにでも行きましょう。」

とキリヤは言うと俺の手を引っ張って近くのレストランまで走る

・・・・・

・・・・・

レストランはイタリアンの店だった。

4人掛けの席に座るとキリヤは話し始める。

「あなたの父さんはデイビス・アンドレスで合ってるわよね？」

とキリヤは言う。
「あぁそうだ。」
と俺は答える。
「ならば、大丈夫だわ。あなたの父さんはこっちの世界だとイギリスのために新しい能力を開発するチームに加入されていたわ。それと正確に言えばデイビス・アンドレスはこっちの世界ではあなたの父さんではないみたいだわ。5年前に離婚しているみたい。」
とキリヤはすべてを言う。

「私のわかったのはここまでかしら。」
とキリヤは言う。

「そうか・・・」
と俺はつぶやく。

「それとさ、あんたはこれから何をしたいの?」
とキリヤは聞く。
「こっちの世界は平和だしマリもあんたの母さんもいる。こっちの世界で過ごすほうがいいんじゃないかしら。その・・・ミイナって子を見つけたところで元の世界に戻れるかわからないし。」
とキリヤは言うと

「俺だってわからねぇよ。これからどうすればいいかわかんねぇよ」
と静かに俺は言う。
「とりあえず、俺は父さんに会ってみる。記憶がなかったとしても・・・何か知ってるかもしれない。だから・・・父さんの居場所を教えてくれ。」
と俺は続けて言う。

「分かったわ。明日行ってみよう。」

とキリヤは言うと最後におやすみと言い家を出て行く。

やっと分かるかも知れない。本当のことを。

－ｅｎｄ－

第1話（53話）　オリジンパワー（後書き）

◇最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇ．ｌｉｖｅｄｏｏｒ．ｊｐ／ｓａｔｏｘｉｓｔａｎｂｕｌ－ｈａｏｕｊｕ／

第２話（５４話）新たな日常（前書き）

☆この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。☆

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

もしよろしければこの小説についてのブログもどうぞ！ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇ．ｌｉｖｅｄｏｏｒ．ｊｐ／ｓａｔｏｘｉｓｔａｎｂｕｌ－ｈａｏｕｊｕ／

第2話（５４話）新たな日常

第2話（５４話）
翌朝。

キリヤはくるまで俺を家まで迎いに来た。
「ザックス！迎いに来たよ！」
とキリヤが言う声で俺は目を覚ます。

「迎いに・・・向かいに来た？・・・・え？」
と俺は寝ぼけながら言う。

「しまった！約束してたんだ！」
と俺は思い布団からすぐ出て時計を確認する。
時間はぴったりだった。

俺はあの怒っているキリヤを想像すると怖くて急いで着替えを開始した。
・・・・
・・・・

「すまん！悪かった！」
と俺は言い扉を開ける。

「本当に私たちの知っているザックスと同じよね・・・・」
とキリヤは言う。

あれ？いつもだったら怒るはずなのに・・・・　こっちのキリヤはそんなに短気じゃないのか・・・と俺は思い車に急いで乗る。

「そういやキリヤ。お前車の免許は？」
と俺は聞く。
「え？あぁここら辺は警察少ないから見つからなければいいんじゃない？お母さんの車借りてるんだ。」
とキリヤは普通に言う。
（無免許運転は違法です。）

こういうところは俺の知ってるキリヤとは変わっていないんだなと思った。

・・・・・
・・・・・
車を1時間半ほど走らせて俺たちはロンドンへ向かった。
ロンドンの町並みは変わっていなかった。まるで世界が変わったなんて思わないぐらい。
キリヤは自分の好きな音楽を流しながら運転している。

「ねぇねぇあんたの知ってる世界ってどんな世界だったの？」
とキリヤは俺に聞いてくる。
「あん？俺の知ってる世界はこんなに明るい世界じゃねぇな。特に俺たちのいた町は兵士が多かった。いつどの国が攻めてくるか分からなかったからみんないっつも警戒態勢だったな。それと・・・・俺とキリヤとテイトとルメリとそのミイナは一緒に旅をした仲間でもあったんだ。それも俺がマリに会うためだけにな。」
と俺は言う。

「へぇ。旅をしたんだ。今の私でもザックスのためだったらするかもしれないな。」
とキリヤはボソッと言う。
俺は音楽のせいでうまく聞き取れず。

「なんか言ったか？」
と俺は聞き返すが
「なんでもないよ！」
とキリヤは言う。

するとキリヤが
「あれ？何かしら？渋滞？珍しいわね。」
とキリヤは言う。
そして、警察がキリヤの車のところへ来た。
キリヤはとても緊張して警察が来るのを待っている。

「おい、キリヤ・・・・おまえまさか・・・」
と俺は言う。
「だ・・・大丈夫よ・・・」
とキリヤは言うと警察が車の窓をノックする。
「イェ・・・イェス？」
とキリヤは言うとキリヤは警察と会話をする。

・・・・
・・・・
３０秒後、警察は話を止めて後ろの車へと行った。
「ふぅ・・・」
とキリヤはため息をつく。

「どうしたんだ？」
と俺は聞く。
「どうやら先で大事故が起きてるみたい。だから後ろから車を違うルートに行かせるって警察が言ってたわ」
とキリヤは言う。
「とりあえずラジオに変えてみましょう。大事故みたいだからニュ

ースでも言ってるかもしれないわ。」
とキリヤは言うとラジオに切り替える。
するとニュースでは事故のことを言っていた。
「どれどれ・・・　今日朝の１０時半ごろ歩道を歩いていた女が急に倒れこみ周りの人が集まってきた後奇声と共に暴れだし数台の車を投げたりなどする事件が起きた・・・その女は数分後意識を失い死亡確認されてる・・・なんだこのニュース？　どう聞いてもありえねぇじゃねぇか。」
と俺は言う。
「でも、ニュースで報道するぐらいだから・・・　本当じゃないの？」
とキリヤは言う。
すると、キリヤの車がバックできる状態になった。
「さてと・・・運転再開っと！」
とキリヤは言うと車をバックさせる。
・・・・
・・・・
２０分後、違うルートを使ってやっと父さんが居ると思われる大学へくることができた。
「本当に・・・いいんだね？」
とキリヤは言うと
「もちろんだ。」
と俺はいい大学の中へと入っていく。
大学の受付で父さんの名前を出すと案内係は場所を教えてくれた。
俺はすぐに父さんが居るといわれた部屋に向かう。
「３０４号室・・・３０４号室と・・・　あ、ここだ」
俺は３０４号室の扉をノックする。
トントン。

「Ｃｏｍｅ　ｉｎ」
と男の声が聞こえる。
この声は確かに父さんの声だ。

俺は扉を開ける。

「Ｗｈｏ　ａｒｅ　ｙｏｕ？」
と父さんは目を合わせずに聞く。
「俺は・・・デイビス・アンドレスの息子のザックス・アンドレスだ」
と俺は言う。
「ザックス・アンドレス・・・　すまんが俺は君の知っている父さんじゃないんだ」
と父さんは言う。
「ならば、確かめたいことがある。ミイナ・アイル。彼女はオリジンパワーといわれる力を持っていてデイビス・アンドレスはその力を使用し術を作り上げた」
と俺は言う。
「・・・」
父さんは黙りこむ
「ほ・・・本当にザックスか・・・？」
と父さんは言う。
父さんは半分涙目になっていた。
「あぁ・・・そうだよ・・・父さん。」
と俺は言う。
－ｅｎｄ－

第２話（５４話）新たな日常（後書き）

◇最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇ．ｌｉｖｅｄｏｏｒ．ｊｐ／ｓａｔｏｘｉｓｔａｎｂｕｌ－ｈａｏｕｊｕ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3561z/

ダーク・マジシャン -Last stage-

2011年12月15日03時49分発行